



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	国民的独立のパスとロゴス (2) : ドモフスキのパトリオティズム1893-1908年
Author(s)	宮崎, 悠; Miyazaki, Haruka
Description	研究ノート
Citation	北大法学論集, 57(3), 258[279]-235[302]
Issue Date	2006-09-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14816
Type	departmental bulletin paper
File Information	hogakuronshu57-3-11.pdf



国民的独立のパトスとロゴス（2）

——ドモフスキのパトリオティズム1893-1908年——

宮 崎 悠

目 次

はしがき

第一章 ドモフスキ研究の現状

- 第一節 研究史
- 第二節 ポーランド国外の研究状況
- 第三節 現代ポーランドの研究動向

第二章 全ポーランド主義の形成

- 第一節 なぜ全ポーランド主義なのか
- 第二節 『我々のパトリオティズム』
- 第三節 革命的プログラムの提言

(以上、第57巻2号)

第三章 シュラフタ国家からの民族的再生

- 第一節 西欧体験と社会ダーウィニズム
- 第二節 『一現代ポーランド人の思想』
- 第三節 民族の気質

(以上、本号)

第四章 闘争のロゴス

- 第一節 プログラム転換
- 第二節 ポーランド人とは誰か
- 第三節 リアリストの04年革命

第五章 未成立国家の外交構想

——『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』を中心に——

- 第一節 誰を敵とするのか
- 第二節 新しい帝国
- 第三節 ホーエンツォレルン国家の拡張
- 第四節 影響力の政治
- 第五節 外交によるポーランド再生

むすび

（以上、第57巻5号予定）

第三章 シュラフタ国家からの民族的再生

ポーランドが、第三次分割（1795年）によって完全にヨーロッパの政治地図から消滅してから、およそ100年後に、ロマン・ドモフスキはその再生と独立とを求める政治活動へ身を投じた。その当時、三分割され、一世紀以上も列強の支配下に置かれて続けていたポーランドの状況からすれば当然のことであるが、ドモフスキは、ポーランド民族が無為のままに存続し続けることができるとは想定していなかった。それどころか、この民族は生存の危機に瀕している、とさえ考えていた。

彼にとって、こうした状況を考える一つの枠組みは、社会ダーウィニズムであった。

ドモフスキがダーウィニズムを知ったのは、遅くとも1880年代末から1900年代初頭と考えられる。彼は、ワルシャワ大学で生物学を専攻しており（1886年入学）、この分野に強い関心を示していた。既に1884年頃から、『種の起源』の訳書やスペンサーの抄訳等を、熱心に読んでいたとされる⁽¹⁾。この点に関する考察を進めるにあたって重要なのが、彼の海外体験である。

ドモフスキの西欧体験は、彼が生物学を修めた時期とほぼ重なっている。初めて大都市パリを訪れた1891-92年にかけて、ドモフスキはパリツキと共に8ヶ月間近くを過ごした。1891-92年のドモフスキの西欧滞在については、友人たちが複数の回想録を残している。例えば、ヴワディスワフ・ヤブウォノフスキは、西欧滞在中を通じて、ドモフスキが他の若い政治活動家と交流し、人脈を広

げていった様子を記している⁽²⁾。とくにパリ滞在については、以下のように回想している。

〔1891年〕11月末、ドモフスキはパリへ移った。…国を出てパリへ行く時、ドモフスキは、生物学概論の一般向け教本をまとめ上げるつもりでいた。ドモフスキは、一度ならず、その構想を私達に示し、しばしばそれについて話し合った。しかし、それにばかり没頭していたわけではなく、結局完成を断念してしまった。

…その頃、ドモフスキはフランス語を知らなかった。そこでどうしたかということ、勉強したわけだ。私と一緒に、しばしば図書館へ通い、時には生物学の本を読んでいた。しかし、彼が何より関心を持ったのは、鼓動するパリの生活であり、いうまでもなく知的活動であった。いつものように、運動や変化を欲し、退屈や停滞を我慢しなかった。人類学学校での講義を聴講しようと私を誘い、生理学や社会学、その他当時著名だった講義の幾つかを聴いた。そのお返しに、私は、ドモフスキを午後のコレージュ・ド・フランスへ連れて行った。⁽³⁾

コレージュ・ド・フランスにおいて、ドモフスキは大変熱心に、荘重な調子のエルネスト・ルナン (Ernest Renan, 1823-1892) によるイスラエル史講義のほか、人気を博していた心理学者テオデュール・リボー (Theodule-Almand Ribot, 1839-1916) の講義等を聴いた。また、アダム・ミツキェヴィチ (Adam Mickiewicz, 1798-1855) の後継者による、「さして面白くもない」スラヴ文学の講義にも出席した。『パン・タデウシュ』の講義時、そこで示された解釈が拙劣であったために、ポーランドから来た若者二人は大いに苦笑したという⁽⁴⁾。

知的な刺戟に満ちたパリから、ジュネーブやチューリヒを経由し、ポーランドへ戻ろうとしたドモフスキを待ちうけていたのは、逮捕と投獄であった。彼がオーストリアーロシア領ポーランド国境において逮捕されたのは、1892年8月12日である。翌1893年1月3日まで、ワルシャワのツイタデラに収容された。

1893年4月、ツイタデラからの釈放直後に執筆された『我々のパトリオティズム』を発表して以降、ドモフスキは、民族連盟の中心的存在として、政治活動に専念する。そして、1895年2月中旬にオーストリア領ポーランドのルヴフへ移ると、より自由な条件下において、政治活動・執筆活動が可能になったの

である。

第一節 西欧体験と社会ダーウィニズム

1898-1900年にかけて、ドモフスキはさらに二度にわたる西欧（海外）体験をしている。まず、1898年2月から7月までの約半年間を、ロンドンとパリで過ごした。そして、一旦ルヴフへ戻った後、1899年2月から8月まで、半年間ロンドンやパリに滞在している。この間、1899年7月には、短期間ではあるがベルリンを訪れている。更に、1899年10月から1900年8月にかけて、ブラジルへ渡航した。こうした、西欧の中心都市および南米植民地における体験は、政治家・著述家としてのドモフスキの生涯において、少なからぬ意味を持った⁽¹⁾。それは、1902-1903年の執筆内容に、直接的・間接的影響を与えたと考えられる。

1898年の渡航について、『全ポーランド評論』の協働者であった詩人ズジスワフ・デンビツキ（Zdzisław Dębicki, 1871-1931）は、次のように回想している。

長い旅になるというので、私たちは仰々しく彼〔ドモフスキ〕を見送りに行った。1898年初頭のことであったと思う。

その年の秋近くなって、ようやくロンドンから戻ったドモフスキは、出発したときのドモフスキとは、様子が全く違っていった。すっかり洗練されたイギリス式のフロックコートを身につけ、ぴかぴかの最新型シルクハット、手袋、文字通り、本物の紳士のようなだった。そうした外面的変化と並んで、内面的な変化もあったに違いない。ドモフスキと私たちを結び付けていた地下活動の他に、彼は、ガリツィアの政治家たちと関係を築き始め、彼らと一緒に会議を催すようになった。…そうした活動について詳しく教えられていたわけではなかったが、「我々の政治」はより広い流れへと出航しつつあるのだ、と私は感じた。⁽²⁾

西欧に渡航する以前（1895-1897年頃）から、ドモフスキは「イギリス式の服装」を身につけていた。それについて、彼は、ポーランド人は外見上「ヨーロッパ式」でなくてはならないため、と説明していたという。つまり、きちんとした身なりをし、清潔なシャツ、襟カラー、ネクタイ、カフスを身につけなくてははいけ

ない。「モスカルの様に」寝巻のまま出歩くようなことがあってはいけない、というのである。⁽³⁾おそらく、「文明化」の度合いにおいてロシア人と自分たちとを区別しようとする考えは、ロンドンやパリの洗練された文化に触れることで、一層強まったのであろう。

更に、1898年のパリ滞在の際、ドモフスキは貪るように西側における社会・政治関係に関する研究を吸収していたという。このとき既に、ドモフスキは、フランスの有力者との接触を求めている。そのため、パリ滞在をフランス語の徹底的な習得に役立てようと努めたのだという⁽⁴⁾。

また、当時パリには、優れたポーランド人作家の一人であるヴワディスワフ・レイモント (Władysław Reymont, 1867-1925) がいた。ドモフスキは、才人としてだけでなく、彼の人柄や、その作品に示される「自然なポーランド性」ゆえに、レイモントを非常に高く評価していた。その代表作『約束の土地』に関する特別講演を行ったほどであった⁽⁵⁾。

後にノーベル文学賞 (1924年) を受賞することになるレイモントとドモフスキとの交流は、書簡から推測して、1898-1899年頃にはじまったと考えられる。最初期の書簡において、ドモフスキは、自分とレイモントとの思想的な共通点について述べ、二人で「同盟」を結ぼうとさえ提案している。

では君に答えよう、この同盟が何の役に立つのかを。ポーランドには、君も知っての通り、自由な人々も、胸いっぱい呼吸することができる人々も、…存在しない。我々 [ポーランド人] のうち、最も重要な大人物たち——シェンキェヴィチやプルスやシフィエントホフスキといった人々——を見よ。彼らの一人一人が、道化師達に感化され影響を受けて、そのグループに残り続け、本当に連中の所に居座ってしまっている。…

もし君が、すぐに疲れてしまうことなく、どこかの仲間内に休息してしまうこともないなら、君をしてこの才あらば、偉大な人物になると私は思う。

私には作家としての才能はないし、自分の文筆において何か探求しているわけではない…けれども、[私には政治という] 仕事における確固とした業績があり、人々の扱いに熟練している。それは、文筆なしでも、私に一定の影響力を確保してくれる。だから、私は多少自分を

評価することが出来、この世界でまだ何かを自分が成すであろうと信じていることが出来る。⁽⁶⁾

上に引用した書簡には、「服従派」あるいはクラクフの「保守派」といった仲間内にとどまる前世代の大家たちに対する批判とともに、自分たちこそが行動を起こさねばならないという決意とが現れている。レイモントは、国民連盟のメンバーとして、晩年までドモフスキとの親交を続けることになる。

こうしてドモフスキは、パリで得たレイモントをはじめとする知己や、水準の高い講義、書物、芸術から多くの新しい知識を吸収し、その視野を広げた。その内面的変化は、後述のように、1903年『一現代ポーランド人の思想』の文面にもはっきりと読み取ることができる。西欧体験は、ポーランドというものを、ヨーロッパ世界において相対化し、客観的に分析する過程でもあった。

1898年7月に最初の西欧旅行から戻ったドモフスキは、ザコパネで夏を過ごした後、ワルシャワヤルヴフにおいて党の活動を行い、再び海外へ出た⁽⁷⁾。ロンドンから戻った後、数ヶ月間逗留しただけで、再び長期間ブラジルへと旅立ったのである。この旅の目的は、ブラジル現地において、国外移民に関する様々な問題や、ポーランド人による入植の進捗について調査することにあった。それが、当時高まっていた国外移民の波に対する、第一の課題となっていたのである。

ポーランド人がブラジルへ移住し始めたのは、1889年頃といわれている。そのほとんどは、プロイセン領から流出した人々で、先行するドイツ人の入植の後追いであった。ロシア領ポーランドからも、1890-1892年にかけて、かなりの移住者がブラジルへ渡った。なお、ガリツィアからの流出は最も遅く、1895年に始まっている⁽⁸⁾。

この頃、「新ポーランド」をパラナに創設することに熱心だった人々は、ブラジルからの旅の報告等を発表していた。ドモフスキのブラジル旅行も、おそらく、そうした紀行文に触発されてのことであろう。パラナ構想に熱狂的に傾倒し、成就することのない夢を見ている人々に対して、彼は批判的であった。ドモフスキは、現地へ赴く決心をし、現実にとどのような事態になっているのかを見て、政治過程においてどのような対処をするべきか、評価しようとしたと言われている⁽⁹⁾。

結局のところ、ポーランド入植地を視察したドモフスキは、新世界に「新ポー

ランド」を建設する案に対して、楽観的な結論には至らなかった。その理由としては、入植地を視察した際、ポーランド人入植者の生活水準の低さに驚いたことや、ブラジルがドイツの影響圏として分割されるのではないか、という危惧を抱いたことなどがあった。

また、ラテンアメリカからの帰国後、ドモフスキは、そこで見た鳥類や植物相・動物相について、生物学の知識を交えつつ語っていたという⁽¹⁰⁾。ドモフスキが、先の西欧滞在で得た生物学の新知識、とりわけ社会ダーウィニズム的な概念や思考方法を、ラテンアメリカで目にした自然の動植物相に当てはめて観察していたとしても、不思議はない。

1900年8月、ドモフスキは、スイスのラッペルスヴィルを経由してザコパネへ戻った。そして、1902年の大半をガリツィア（オーストリア領ポーランド）のクラクフで過ごし、『一現代ポーランド人の思想』の素案となる一連の記事を執筆した。その内容には、西欧（海外）体験が、徐々に執筆に反映され始めていた。それは、直裁に体験を述べた見聞録ではなく、西欧から得た新知識とりわけ社会ダーウィニズムが、ドモフスキの世界観に深い影響を与えていたことをうかがわせる論考であった。

第二節 『一現代ポーランド人の思想』

『一現代ポーランド人の思想』（1903年）⁽¹⁾は、全七部、約80頁からなるドモフスキ前期の代表作であり、1902年に「全ポーランド評論」紙の記事として掲載されていた時期から、既に国民民主党内において「規範的」な位置づけを獲得していた政治思想論文である⁽²⁾。

この論文は、1902年に国民民主党機関紙の記事として書かれた文章をもとにしている。そうした経緯からすれば、この文章が国民民主党の見解を表すものとして、党内に大きな影響を与えたであろうことは推測に難くない。しかし、ドモフスキ自身が序文で断っているように、それらの記事は翌年5月までにドモフスキの手によって編集され、ドモフスキ個人の思想を説明する内容に書きなおされている。この再編集作業を通じて、論文の性格は、党機関紙の記事としてのものから、ドモフスキ個人の政治思想を公表するものへと変化し、「党のマニフェスト（綱領）ではなく、前々から民族の生存 byt narodowy という問題について思索してきた、一人の人間の思想ひとつかみ」⁽³⁾を述べたものとなっ

た。

ドモフスキは、冒頭、当時のロシア領ポーランドにおける二つの趨勢を挙げ、まず個人的・私的な利益を重視しポーランド・ネイションについて顧慮しない人々を批判する。これは、「有機的労働」を唱導し、経済活動や文化活動に専念しようとする、「服従派」を念頭においた批判であろう。そして、次に、ポーランドが国家として消滅してから100年以上経過しているにもかかわらず、ポーランドという概念だけを存在させ続けることによって、自己のアイデンティティを保とうとする人々を批判する。これは、旧き良きポーランドという、輝かしい過去の栄光にばかり目を向け、それによって自己の尊厳を保ち、「歴史的ポーランド」の回復を目指す、一月蜂起世代の亡命活動家らを念頭に置いた批判であり、また後述のように、「服従派」に対する反動として生じた、若い「屈服せざる者たち niepokorni」、ポーランド民族の価値を理想化して捉えようとする人々への批判であった。彼等は、実際にポーランド国家を復活させる具体的方法についてはあまり考えておらず、また、それを考えていなかったからこそ、国境の維持が困難な程に広大な「歴史的ポーランド」の復活という、二重に非現実的な目標を抱くのであろう、とドモフスキは考えていた。

民族を命のない数字として、ある一定の言語を話し一定の領域に居住する個人々の集合体として捉える思想と、私の思想とを、区別しておきたい。私を理解するのは、民族の中に、不可分の社会全体を、つまり数え切れないほどの結び目で有機的に結合し結びついた人間の共同体を見る人々だけであろう。それらの結びつきのうち、あるものは、遠い過去にその起源を持ち、人種を創出した。また別のもは、歴史上知られているように、伝統を創出した。さらに別のもは、その人種・伝統・民族の気質の内実を豊かにし、将来更にしっかりと強化できるように、今日形成されている結びつきである。ポーランド性をこれから獲得しなければならない人々のためではなく、自分と民族・その生命・その要求・その熱望との結びつきを深く感じている人々のために、活動と戦いにおいて割り当てられた義務を自覚する人々のために、私は書いている。⁽⁴⁾

ドモフスキにとって、民族とは、単に一定領域に居住し同一言語を共有する

人間の集合体ではなかった。人数によって計れるものではなく、細胞のように、複数の複雑に関係しあう結び目が集まったものとして、有機的な共同体として、民族を想像していたのである。そして、民族は、現在生きている人間同士の繋がりがだけでなく、過去や未来を共有するという意味での結びつきをも含むことが示唆されている。つまり、ドモフスキのいう、原始の時代に生まれた「人種」や、歴史的に形成されてきた「伝統」を共有し、それらを将来的に保持し、強化していく、人間同士の時間をこえた結合状態が、ここで構想されている民族であった。

そのため、民族の構成部分たるポーランド人それぞれが、自分が個人的存在であると同時に、ネイションという集合体の一部である、と常に意識し、それに政治的に献身することが求められている。

私はポーランド人である——この言葉には、深く理解するなら、多くの意味が含まれている。

単に、ポーランド語を話すから、同じくポーランド語を話す他の人々が精神的に近い存在であり理解しやすいと感じるから、(中略)といった理由だけで、私はポーランド人だというのはない。個人的・私的な生存領域 *sferę życia* があるのと同時に、自分が属する民族の集団的生存 *zbiorowe życie narodu* があることを認識しているから、自分の個人的事柄や利害と並んで民族の問題やポーランドの善 *dobro* が、一個の総体として存在することを知っており、個人的事柄としては神聖化することが許されないが、民族の問題としては神聖化するにふさわしい最重要の善として存在することを知っているから、私はポーランド人なのである。⁽⁵⁾

ここでは、民族にかかわる事柄は、個人的な事柄よりも優先され、その総和より質的に重要なものと位置づけられている。ドモフスキは、「ポーランドの善」について、個々のポーランド人の利害の単なる総和ではなく、それを超えた、神聖化されたものとして存在する、民族の公共善ともいべきものを想定していた。そうした、構成員個々人の利害よりも、民族としてのポーランドの利害を認識することが、ポーランド人の要件とされたのである。

第三節 民族の気質

『一現代ポーランド人の思想』第二部「民族の気質 charakter narodowy」において、ドモフスキは、「気質」およびその生成条件という観点から、ポーランド民族と他の諸民族、とりわけ西欧の諸民族とを比較している。

研究上、「民族の気質 national character」という概念は、市民階級を基盤とする民族に関して用いられ、観察可能で定義可能なものとする見方もある⁽¹⁾。しかし、こうした「民族の気質」概念は、19世紀前半のポーランドにおいて想定されていた民族像とは、そぐわないものであった。民族とは、個人と諸民族に自由な新時代をもたらすための行為（それはしばしば武装蜂起への参加と解された）に根ざすものとされていたからである。換言するなら、19世紀前半のポーランド・ナショナリズムは、文化的画一性や、社会的規律を課する段階にはなかったのだといえる⁽²⁾。『一現代ポーランド人の思想』（1903年）においてドモフスキが用いている「民族の気質」という概念は、これらの議論とは異なり、社会ダーウィニズムの影響を受けた概念であった。これは、後述のように、有機体（生命体）のアナロジーでとらえられる民族がもつ特徴であり、環境つまり社会状況に応じて変化するものとしている。

西欧体験を経て、ドモフスキ自身、ポーランド政治は旧ポーランド域内や分割諸帝国との関係においてのみ完結するものではなく、国際社会に通用するものでなくてはならないと認識するようになった。1893年の記述内容に比べ、西欧体験を経て、ポーランドの歴史や状況を見直し、世界とりわけヨーロッパにおいて相対化して、再度位置づける必要を認識している点に変化がみられる。その上で、改めてポーランド民族の現状を示し、問題点を指摘している。

我々は、そうした〔ある種の美点となるべき気質という〕観点から自己についてよく考えることが余りにも少ないし、自分自身について余りにも知らなすぎる。他方で、我々は殆ど旅行しないし、〔するにしても〕不慣れな旅行をしているし、その結果として、他の諸民族のことを我々は知らずにいる。今日の国際社会における競争の中で、何が我々の下等性 niższość をなしているのか、また何が高等性 wyższość をなしているのか、我々は知らずにいる。⁽³⁾

ドモフスキは、自分たちの問題点のひとつが、視野の狭さにあると考えていた。おそらく、ポーランド人は、諸民族との関係において自民族を客観視することに慣れていないことを西欧滞在のさいに痛感したのであろう。「ポーランド民族の気質」の「欠点」を改善するためには、それがどういった問題なのか、どれだけ広範な、持続的な問題なのかを見定め自覚しなくてはならない、にもかかわらず、世上ではそうした定義が試みられることすらない、とドモフスキは悲嘆している。

そうした現状に至る背景を、「(一月) 蜂起後の反動は、とくに過大な自己批判に現れた」⁽⁴⁾として、一月蜂起の敗北と、その後生じた反動から説明している。ドモフスキによると、そうした「自己批判」を行ったのは、「クラクフのスタインチクたち」と、「ワルシャワのポジティヴィストたち」であった。前者「クラクフのスタインチクたち」は、クラクフの保守派グループを指す。彼等は、一月蜂起の5年後、1869年に『スタインチク選集』*Teka Stańczyka* という表題の風刺パンフレットを出版し、政治的独立をめざす武装蜂起を嘲笑した、ガリツィアの若手(当時)保守グループであった。その名のもとになったスタインチク(Stażczyk, ca. 1480-1560)は、三代の国王に仕えた実在の宮廷道化師であり、政治状況分析における慧眼で知られた。ドモフスキが『一現代ポーランド人の思想』を執筆した際(1902年)には、彼等はすでに、中堅・壮年保守派の主要グループとして位置づけられる存在になっていた。また、後者「ワルシャワのポジティヴィストたち」は、ドモフスキが『我々のパトリオティズム』(1893年)において「服従派」と揶揄した、政治活動から撤退し、経済的・文化的分野に専念しようとした人々をさす。この「ワルシャワのポジティヴィストたち」は、クラクフの保守派と同世代の人々である。

ドモフスキは、一月蜂起後の反動として、その敗北をじかに経験した世代の人々が、「我々の民族が他の諸民族よりも惨めであることを暴露するために」、ポーランド民族の「精神から美しい衣装を取り去った」のだと言い表している⁽⁵⁾。こうした一月蜂起世代の態度は、「自身の気質を修正・改良」し、ポーランド民族の「諸所の欠点をなくし、外国から彼らの美点をなすものが何であるのかを学ぶ」⁽⁶⁾ことを目的とするものであった。これは、反省に基づく自己改善の取り組みであり、同時に、過度に西欧かぶれの側面もある態度であった。しかし、反面、当時のポーランドが置かれていた分割支配状況を冷静に考えるなら、こうした態度決定は、理性的な判断に基づくものであったともいえるで

あろう。

一月蜂起世代の非政治的態度がなお有力である中、ポーランド民族が持つ「力・能力・民族の美德への信念」を矜持とする「新たな世代が、はやくも活動舞台へ姿を現し始めて」⁽⁷⁾ いるとして、一月蜂起世代とは見解を異にする新しいグループの登場に、ドモフスキは注意を払っている。

そうした〔新たな世代がポーランド民族の力や能力、美德に対して抱く〕信念は、しばしば、ポーランド気質を理想化することに対する熱望を伴っていた。この熱望は、我々の精神がもつ気質を維持し発展させようと努力するだけでなく、他の諸民族のそれを凌駕する、ポーランド型 typ polski を示そうと努力するものでもあった。⁽⁸⁾

この新しいグループとは、1860-70年代生まれの、行動を重視する若者たち、いわゆる「屈服せざる者たち」を指す。そうした若者の一人フランチシェク・ノヴィツキ (Franciszek Nowicki) は、「明日はわれらのもの——我々若者のために／夜は白む 老いたる者は死すべし」と詩に記している⁽⁹⁾。「屈服せざる者たち」は、一月蜂起世代の保守的な人々が経済的・文化的活動へと撤退したことに反発し、政治的行動を取り戻そうとしていた⁽¹⁰⁾。

これは、次世代による揺れ戻しともいうべき、志向の変化であった。つまり、ポーランド民族がもつ「気質」の型を、特別でよいものとし、理想化することにパッションを抱く人々が現れたのである。いわば、ポーランド版の国粹主義ともいえる考えであった。

こうした新旧世代の対立は、一月蜂起における敗北を機に、自信を喪失し外国から学ぶことに積極的になった人々と、自身に内在する力を再認識することで自信を取り戻そうとした人々との対立であった。

一方において、自己の気質とほとんど縁を切り、他者の気質を我が物とする必要性について、なお語っているときに、他方においては、ポーランドの能力と気質を特別なものとして高く掲げ、我々の民族の個性を構成するものの発達・強化の必要のみを語っている。⁽¹¹⁾

しかし、両者は全く反対の立場に立っていたわけではなく、むしろ両者の主

張は、ともに民族的独立の存亡にかんする危機感や、他の（とりわけ西欧の）諸民族に対する劣等感の強さを表すものといえるであろう。

ドモフスキ自身、「概して、ポーランド民族の気質の問題は、我々の手に負えないものである。」⁽¹²⁾と述べ、現状に問題があること、しかもそれが巨大であることは認識しつつも、「ポーランド民族の気質」の位置づけや評価について、世上では議論が分かれ、矛盾し混沌とした状況にあることを嘆いている。

我々にとってポーランド民族の気質とは災厄なのか、宝なのか。それについて誇りをもつべきなのか、それとも恥じるべきなのか。我々には分からない。…一方には、我々は極めて明瞭かつ恒久的な、数世紀にわたって変わることのなかった民族的気質を持っているという人々がいる。他方には、我々には、そんなものは全く無いと言う人々がいる。…例えば、我々は自由を最も愛する民族であると言い、同時に、屈従し頸木の下に頭を垂れるすべを我々ほど良く知る者はないと言う見解を、あるいは、我々は最も騎士的な民族であり——かつ並外れた臆病者である、という見解を、または、我々は誰よりも熱いパトリオットであり——かつ、いとも容易く、私的な理由で公的な事柄を裏切りもする、という見解を、本当に我々は聞いたことがないのだろうか。⁽¹³⁾

これらの矛盾した自己評価には、「ポーランド民族の気質」に対する、誇りと卑下とが混在している。アンビヴァレントな自己評価の中で、「この迷宮において道に迷わないためには、どうしたらよいのだろうか。」⁽¹⁴⁾とドモフスキは問う。まず、そうした混沌を解決しなければ、実際の政治活動を行うことすらできないと、彼は考えていた。

民族の気質の問題は、純粋に文学的な、実務家や活動家にとって無関係の課題ではない。何にせよ恒久的なものを打ち立てたいのなら、それがどのような分野の活動プログラムであれ、何らかの広範な意味を持つ協会の設立であれ、また、準備のために真の広範な民族的運動が必要となる独立国家の建設であれ——我々は常に、そして何よりも、民族の気質を尊重しなくてはならないし、我々の人種がもつ能力や道

徳的特質を尊重しなくてはならない。そうでなくては、組織は十全に機能しないであろうし、長期間存続することさえ不可能であろうから。⁽¹⁵⁾

ドモフスキにおいて、「ポーランド民族の気質」の問題は、たんに思想的・抽象的な問題として認識されていたのではなく、実際に政治活動を行う活動家にとっても重要な課題と位置づけられていた。とりわけ、ポーランド国家の独立を目的とする民族的運動にとって、それが広範な組織として、いわば国民的規模において展開されるためには、「ポーランド民族の気質」は、何よりも重視されるべきものであった。なぜなら、「民族の気質」を理解することは、ポーランド民族が持つ「能力や道徳的特長」を把握することに他ならなかったからである。そのため、実際の活動において、「民族の気質」を意識しつつ活動を進めることが必須とされた。

ここで改めて、「ポーランド民族の気質とは何なのであろうか」⁽¹⁶⁾とドモフスキは問う。そして、ドイツ人やフランス人、イギリス人といった西欧の諸民族と比較しつつ、「民族の気質」というものを特定する方法をとっている。

ドイツ人やフランス人、イギリス人の気質について述べる際には、所与の民族の様々な層を構成する人々に共通の特徴を探し、それらを収集し、民族の気質を認識することになる。それと同時に、各民族において、社会的諸類型の区別がなされる。フランス人の全ての身分に共通する気質がもつ、諸特性について論じるのなら、その際にはフランス・ブルジョワの型が、フランス貴族の型と、極めてかけ離れたものであることを忘れてはならない。⁽¹⁷⁾

ここで注目したいのは、「民族の気質」というものが、民族の中に存在する諸階級の「型」と区別されている点である。様々な階級に特有の気質がある一方で、「民族の気質」は、そうした階級を貫徹し、全身分に共有されるものである、とドモフスキは考えていた。西欧と異なり、そうした階級に起因する差異が、ポーランドにはみられないと、ここで彼は強調している。

ポーランドにおいては、こうした事柄について〔西欧とは〕事情が

異なっており、ポーランド・シュラフタの気質が、民族の気質として普及している。なぜなら、シュラフタは、つい先ごろまで、ほぼ独占的に、民族を構成していたからである。ここで、身分の気質と、民族の気質とが混ざり合い、一つの社会階級において形成されたものが、特別な生存条件の影響を受けつつ、ポーランド気質の基礎的な特質とみなされるようになった。これらの特質は、生存条件の変化と共に、急速な壊滅を運命付けられたものでもあった。⁽¹⁸⁾

ドモフスキによれば、「民族の気質」が通常、国民を構成する全ての階級によって共通するものであるのに対し、ポーランドの特殊な点は、「民族の気質」と、シュラフタという一階級の「気質」とが、同じものになっていて、それがシュラフタ以外の諸階級と共有されていないことにあった。彼はその理由を、歴史的背景に求めている。既に述べたように、ポーランド民族を構成するのは、シュラフタという貴族階級に限定されていたため、シュラフタ特有の気質であったものが、ポーランド民族の気質として認識されることとなったという説明である。

更に、ポーランドのシュラフタが置かれた環境が、そうした混同を促進する大きな要因であったと、ドモフスキは考えていた。

ポーランド・シュラフタの型は、文明的な世界に存在する他の諸類型全般と異なる諸条件の下で芽生え、精神的に形成されたもので、その性格は、他の場所で見られるあらゆる類型と、極めて異なったものにならざるを得なかった。⁽¹⁹⁾

ただし、そのようにして形成された特殊な「シュラフタの型」が、恒久的に、「ポーランド民族の気質」で有り続けているわけではない、とドモフスキは指摘する。

こうした諸条件のおかげで生じた〔シュラフタ型の〕性格的特徴を、我々の人種の基本的な特質と見なすのは、大きな誤りである。これらの諸条件は姿を消し、その結果、それらの諸条件によって形成された〔ポーランド・シュラフタの〕型は次第に姿を消していった。〔ポーラ

ンドにおいて] それらの諸条件が再び生じることは決してなく、従って、[ポーランド・シュラフタ]型が再生することも決してなかった。⁽²⁰⁾

つまり、ある特殊な諸条件・環境下において形成された「シュラフタの型」は、環境の変化に伴い消滅した、というのである。後ほど詳述するように、ある「型」の「気質」が、環境の変化に応じて形成されたり消滅したりするものとして描かれている点に、スペンサーのいう「適者生存」の援用が見られる。

シュラフタがなぜ特殊な「気質」を形成するに到ったのか、それについては、シュラフタが社会的背景を根柢に、以下のように説明されている。

文明の境界地において、ヨーロッパ的な経済活動や、社会つまり都市が辛うじて発展の途についたばかりの国において、国家を保持し組織化することを任じられたシュラフタは、絶対的な権力を獲得した。…その権力を利用して、シュラフタは、諸都市の発展を抑制し、諸都市を最終的な破滅へと導いた。もし正常な諸条件下であったなら、それは長続きしなかったであろう、なぜなら、増大しつつある国の生産や、東西との貿易関係は、市民身分の力の伸長を、時として、引き起こさずにはいなかったからである。⁽²¹⁾

都市の政治的・経済的機能がまだ十分に発達していなかったポーランドにおいて、支配階級であったシュラフタは、その絶対的な権力をもって、諸都市、ひいては都市市民の成長を妨げた。それが、たとえばフランスにおけるブルジョワの台頭のようには歴史的進展をみなかった原因であるとドモフスキは考えていた。

他方で、ポーランドにおいては、市民階級の「代用物」的存在、ユダヤ人が成長し、社会的機能を担ってきたとドモフスキは指摘する。

とはいえ、ポーランドには、ここ数世紀間の共和国を振り返っても前例になく急速な成長をしつつある分子が多数存在していた。それは政治的権力や国家の運命に対する影響力への野望を持たない市民身分の代用品になる準備ができていた分子であった。その分子とは、ユダヤ人であった。⁽²²⁾

ドモフスキは、シュラフタが都市を押さえ、都市において政治的ライバルとなるべき市民階級（中産階級）を追い払い、分割に到るまで共和国における独占的・絶対的な支配を確保しえたのは、ユダヤ人の貢献があったからにほかならない、と断じている。

彼は、シュラフタと協力的関係にあったユダヤ人にこそ、歴史的に、ポーランドの社会状況、つまり「気質」を涵養する「諸条件」の特殊性が生じた原因があったのだと論じている。

特定の国民に対してどのような共感も覚えず、従って政治的野望全般を奪われており、ただ国やその住民から物質的搾取を行うことのみを熱望する、多数のユダヤ人住民の存在に、結局のところ、ポーランドにおける歴史的状況の、最重要の起源がある。ユダヤ人のおかげで、ポーランド民族は、19世紀中葉までシュラフタの民族のままであり続けた。それ以降でさえ、そうかもしれない。なぜなら、今日もおお、ある程度、シュラフタの民族であり続けているからである。⁽²³⁾

ユダヤ人は、政治を度外視し、経済的利益のために、ブルジョワの「代用」として経済活動の担い手となった。ポーランド人の都市民が、経済活動を通じて成長し、政治勢力になっていけば、フランスの第三身分にも相当する重要性を持っていたはずである。それが、ポーランドが「不完全な社会」であり続けた、という意味であった。こうした分析は、ハンナ・アレントの言う、特権を付与され、国家内の外部者として、支配階級のために経済活動を担うユダヤ人の位置づけと一致している。⁽²⁴⁾

もしも彼らでなく、彼らによって社会的機能を抑制されたポーランド人住民部分が、シュラフタと競合する政治勢力として組織化されていたなら、ヨーロッパ諸社会の発展において重要な役割を果たした第三身分として組織化されていたなら、現代的社会活動の主要なファクターとなったであろう。もしも彼らでなく、市民が四年国会の時代に舞台へ登場していたなら、それは、空前絶後の強烈な現象となったことであろう。⁽²⁵⁾

こうして、通常であれば貴族階級のライバルとなるべき「第三身分」に相当する層が成長しなかったため、シュラフタは、権力と特権（諸権利）を維持するための努力を何ら行わなくても良い環境下に置かれ続けることとなった。それが、怠惰で競争心のないシュラフタ「気質」が形成された原因であり、「ポーランド国家の運命を決定する結果を引き起こした」。⁽²⁶⁾ドモフスキがシュラフタを「ドードー鳥」になぞらえたゆえんであった。

我々は不完全な社会のままであり続けた。重要かつ最も複雑な経済的機能部分の全体が、分子の手に握られた。…こうしてネイションと国家の運命は、…権力と特権の維持のための努力を必要としない環境にある、単一の階級〔シュラフタ階級〕の手に握られ、それが、まさに、ポーランド・シュラフタの精神的類型を決定した。そして、我々はそれ〔シュラフタ型〕に依拠して、我々〔ポーランド〕民族の性格を表現することに慣れ親しんできた。⁽²⁷⁾

こうして、シュラフタ階層の怠惰で競争心のない気質が、「ポーランド民族の気質」となってしまったが、しかし、それは決して恒久的なものではない、とドモフスキは考えていた。一般に、「民族の気質」とは、不変のものであるといわれているが、そうではなく、「気質」を涵養する環境の変化に応じ、それに適合した特長が「民族の気質」として強く現れるようになる、というのがドモフスキの理解であった。

民族の気質とは、何世紀にもわたって変化することのない恒常的なものである、という意見をしばしば耳にするにもかかわらず、現実はそのような意見を極めて明白に否定している。何よりも、今日の諸民族は、一つの同質の人種から成り立っているわけではない。所与の民族の様々な人種的構成要素が、様々な社会状況において、自己の役割や社会的影響力の度合いを、それを通じて、より強い又はより弱い痕跡を、ネイションの性格の上に残しつつ変更することができるようになっていく。⁽²⁸⁾

ここで着目すべきは、第一に、一般には不変とされていた「民族の気質」と

いうものが、変わりうるものとして想定されている点である。そして、第二の点は、ドモフスキが、民族とは「単一の人種」から成り立つものではなく、複数の「人種の構成要素」が混ざり合っていると認識していた点である。それらの「人種の構成要素」のうち、生存条件の変化に応じて、環境に適合するものが、その民族の「気質」として、強く現れるようになる、というのがドモフスキの考えであった。つまり、一民族の「気質」が決定される過程においても、「淘汰」が働いている、というのである⁽²⁹⁾。

社会においても、自然においてと同様、様々な人種タイプがもつ生存の能力 *zdolność do życia* から生じた淘汰が、多かれ少なかれ行われている。我々の民族〔ポーランド民族〕は、他の諸民族に比べて、より同質的な人種から成り立っているわけでは全くない。スラヴ系を構成する諸要素は、ポーランド民族の中で、しばしばゲルマン系の、また山岳ドイツからスカンジナビア、数多くのフィン、リトアニア、タタル、モンゴル等々といった様々な出自を持つ、かなり大きな混合体と、混ざり合った。⁽³⁰⁾

興味深いことに、ドモフスキは、「ポーランド民族」についても、「同質的な人種」から成り立っているものではなく、スラヴ系の要素が主としてドイツ系の人々と混ざり合ったものだと認識していた⁽³¹⁾。

こうした、「ポーランド民族」のなりたちを、必ずしも同質なエスニック共同体とはみなさず、民族内での文化的多様性を想定する見方は、19世紀ポーランド知識人の間にしばしばみられるものであった⁽³²⁾。その意味では、ドモフスキも、19世紀的な寛容さを継承していたといえるであろう。ただし、今日のリトアニアやベラルーシ、ウクライナにあたる地域を含む「歴史的ポーランド」の回復を考える人々に対して、東欧の諸民族の多くは、包容力ある（ひいては拡張論的な）ポーランド再生構想を、自民族への挑戦として捉えていたことに注意する必要がある⁽³³⁾。

「民族の気質」は、「環境」つまり社会的条件の変化におうじて「淘汰」され、残存した適合的特徴である、したがって、ある社会活動に適した「型」の形成には、「環境」がもつ影響力を看過できない、とドモフスキは考えていた⁽³⁴⁾。そのため、遡って考えるなら、「シュラフタの生活環境がその精神型に与えた影

響について、より深い考察を行うことで、我々が〔ポーランド〕民族の気質と見なしているものを、より広く理解することが出来る」⁽³⁵⁾とも述べている。

では、ドモフスキが念頭においていた「環境」つまり社会的条件とはどのようなものだったのであろうか。

有機体〔生物〕の発達が、より厳密な諸組織やセルの相互依存に、左右されているように、社会の発展は、より厳密な、それぞれの層〔階級〕や諸個人を相互依存へと導いている。社会が発展へと前進すればするほど、他の社会構成員との関係において、個人の願望は少なくなり、果たさねばならない義務は多くなる。⁽³⁶⁾

ここでドモフスキは、「社会」を、あたかも一個の生命体として描いている。社会を構成する諸階級や、更に、諸階級を構成する諸個人は、生物を構成する数多くの細胞のように、互いに結びつきつつ、「社会」を発達させている、という見方である。そうすると、個々人は細胞のように、社会全体を構成するための煉瓦の一つとして働くことになり、個人的な願望を制限されることになる。しかし、それについて懸念する必要はない、とドモフスキは説明している。なぜなら、ある程度の「社会的強制」を受けることによって、表面的には、個人は社会に対して従順に貢献するようになるが、しかし、それによって、「魂のより深い本質を傷つけ」られることはないし、「より高いレベルにおけるその個人的特性の発展をむしろ促進する」からである。そして、イギリスを例に挙げて、イギリス人が構成するする「社会の中では、社会的強制ひいては人生の内面の形式整理が最も強く、また同時に、イギリスほど精神的な個人性が強い場所は他にない。」⁽³⁷⁾と述べている。

こうした、イギリスに見られるような、個人としての精神的独立の維持と、個人に対する社会的強制に基づく社会の発展との両立は、ポーランドにはみられないものであった。なぜなら、「ポーランドのシュラフタ社会において、諸個人の相互依存は前代未聞な程に薄弱で、その弱さは、それが社会という言葉の意味に完全に見合っていないくらいであった」ためである。シュラフタは、「誰にも阻止されたことのない特権において、直接に、ライバルのいない、戦いのない、緊張のない、個人の美点を役立てることのない、自己の欠点や弱点ゆえに滅亡の危険にさらされるのことはない、温室のような生存環境」の中で、そ

の運命を規範や特権によって守られていた。したがって、シュラフタの中で「淘汰」が行われることはなく、高德な者も卑しいものも、また勇敢な者も臆病者も、シュラフタ仲間のなかでは同等の地位を占めていたのである⁽³⁸⁾。

そして、「彼〔シュラフタ〕は巨人だったが、しかし、大洋の諸島にある自己の生息地にライバルがいなかったおかげで、誰にも繁栄を妨げられなかったおかげで、巨人に成長した、かのハト目の鳥ドードーの類の巨人であった。」と、シュラフタの運命を、ドードー鳥のそれになぞらえ、「淘汰」によって「気質」が変化する過程を説明している。「ドードー種 *gatunek dronta* は、諸島が発見された後、突然人間がやって来たのと同時に、非常に急速に消滅した。ポーランド・シュラフタ型は、新しい生活規範への大勢の国の移行とともに、既に退場して」いるのだ、と⁽³⁹⁾。

更に、「ポーランド・シュラフタには、とりわけ共和国が存在していたここ数世紀の間、ヨーロッパの諸社会のどこにも、そのカウンターパートにあたるものが存在していなかった。」ために、王権や法律、国家に対する義務、経済活動の環境といったものが、ポーランドにおいては、変化してしまった。法律は、シュラフタに政治的な庇護を与えるためのものとなっていた。他方で、経済的な特権は、ユダヤ人が担っていた。こうして、シュラフタは、「競争や戦いや所有物を喪失する危険のない状態で、温室の中の植物のように」⁽⁴⁰⁾生きることが出来た、というのである。

すでに述べたように、ドモフスキは、「民族の気質」が可変的なものだと考えていた。それは、ポーランド民族がシュラフタ型の「気質」から脱却できずに「淘汰」され消滅してしまう可能性だけでなく、新しい「気質」に変化する可能性も持っていることを意味していた。そして、新しい「気質」において、他の諸民族との競争を生き抜くために必要となるものとは、現実政治における闘争のロゴスであった。

註

第三章 シュラフタ国家からの民族的再生

⁽¹⁾ Fountain, Alvin Marcus, *Roman Dmowski : Party, Tactics, Ideology 1895-1907* (New York, 1980), pp.103-104. Kułakowski, Mariusz, *Roman Dmowski w Świśle Listów i Wspomnień* (Londyn, 1968), t.2, s. 23-24.

⁽²⁾ 特に、「クーデター」を共謀することになるバリツキとの出会いは、ポーラ

ンド内における政治活動の基礎を築く上で、また、三分割領全域にわたる政治活動を開始する上で、重要な転機となった。

(3) Kułakowski, *op.cit.* s. 146.

(4) *Ibid.*

第一節 西欧体験と社会ダーウィニズム

(1) Kułakowski, *op.cit.* s.209.

(2) Kułakowski, *op.cit.* s.210より再引用。

(3) Micewski, Andrzej, *Roman Dmowski*(Warszawa, 1971), s.49-50. 文中の「モスカル」は、ロシア人に対する蔑称。

(4) Kułakowski, *op.cit.* s.213.

(5) Kułakowski, *op.cit.* s.214.

(6) Kotowski, Witold, "Reymont i Dmowski", *Tygodnik Warszawski*, 1946, nr.3 z 20 stycznia を、Kułakowski, *op.cit.* s.216-217より再引用。なお、文中の「道化師達」は、ガリツィアの保守派グループであるスタインツィツィ *Stanczyzy* をさしている(本章第三節参照)。また、「保守派」の大物として挙げられているアレクサンデル・シフィエントホフスキ (Aleksander Świątchowski, 1849-1938) は、一月蜂起敗北後、武装蜂起により独立回復を目指す考えを徹底して批判し、「有機的労働」を唱導した中心人物の一人であった。1881年に『プラウダ』紙を創刊、自ら健筆を揮ったが、1890年代になってロシア政府の弾圧政策が強化されたため、1900年に同紙を売却し、以降ルブリンの農民やウッチの労働者に対する非合法の啓蒙活動に専念した。

(7) Kułakowski, *op. cit.* s. 217-218.

(8) Fountain, *op. cit.* p. 52.

(9) Kułakowski, *op. cit.* s. 210-211.

(10) Fountain, *op. cit.* pp. 55-60.

第二節 『一現代ポーランド人の思想』

(1) ここでは Dmowski, Roman, *Myśli Nowoczesnego Polaka* (1934, Warszawa) (以下、Dmowski, *Myśli.* と表記) を底本とした。

(2) Porter, Brian, *When Nationalism Began to Hate : Imagining Modern Politics in Nineteenth-century Poland* (New York, 2000), p.196.

(3) Dmowski, *Myśli.* s.18.

(4) Dmowski, *Myśli.* s.26.

(5) *Ibid.*

第三節 民族の気質

(1) Mosse, George, *Confronting the Nation : Jewish and Western Nationalism* (Hanover,1993), p.122.

(2) Porter, *op.cit.* p.17.

(3) Dmowski, *Myśli.* s.42.

(4) *Ibid.*

(5) *Ibid.*

(6) *Ibid.*

(7) Dmowski, *Myśli.* s.43.

(8) *Ibid.*

(9) Porter, *op.cit.* p.75, note 2より再引用。

(10) 「屈服せざる者たち niepokorni」とは、政治的行動を重視する若者集団の総称であり、「屈服の拒絶」という言葉に社会的反抗のニュアンスを含む。「服従派」世代による政治活動の中断があった後、再び伝統的蜂起主義を髣髴とさせる「行動への回帰」を示したことに特徴がある。「屈服せざる者たち」の思想的特徴については、Porter, *op.cit.* pp.75-106に詳しい。

(11) Dmowski, *Myśli.* s.43.

(12) *Ibid.*

(13) *Ibid.*

(14) *Ibid.*

(15) *Ibid.*

(16) *Ibid.*

(17) Dmowski, *Myśli.* s.43-44.

(18) Dmowski, *Myśli.* s.44.

(19) *Ibid.*

(20) *Ibid.*

(21) *Ibid.*

(22) *Ibid.*

(23) Dmowski, *Myśli.* s.44-45.

(24) ハンナ・アレント、大久保和郎訳『全体主義の起原 I 反ユダヤ主義』（みすず書房、1999年）。

(25) Dmowski, *Myśli.* s.45.

(26) *Ibid.*

(27) *Ibid.*

(28) *Ibid.*

(29) *Ibid.*

(30) Dmowski, *Myśli.* s.46.

(31) *Ibid.*

(32) Porter, *op.cit.* p.16.

(33) *Ibid.*

(34) Dmowski, *Myśli.* s.46.

(35) *Ibid.*

(36) Dmowski, *Myśli.* s.46-47.

(37) Dmowski, *Myśli.* s.47.

(38) *Ibid.*

(39) Dmowski, *Myśli.* s.48.

(40) *Ibid.*